

埋め込み節のムードとトコロ節の意味論\*  
(Embedded Moods and the Semantics of *Tokoro*-Clauses)

山田 彬堯 (Akitaka Yamada)  
大阪大学 (Osaka University)

キーワード : Embedded Mood, 形式意味論, コーパス分析, Grammatical Replication

## 1. はじめに

近年の意味論の研究では、接続法／直説法の選択を代表に、埋め込み節のムードの研究が進み、その選択条件についての個別言語間変異に注目が集まっている (Farkas 1992; Villalta 2000, 2006, 2008; Giannakidou 2009; Portner 2018; Faulkner 2022)。日本語は、動詞の屈折ではなく、ト／コト／ノといった補文標識によって、埋め込み節のムードがマークされ、どのような主節動詞がどの埋め込み節を選択するのかについて研究が蓄積されている。とりわけ、研究者の関心を集めてきたのが、コト／ノ節の確率的な交替である。ノ節が具体的な事象を、コト節が抽象的な命題を指すという傾向が指摘され、この一般化から、(1)に示すような知覚動詞でコト節の容認度が低いという事実が説明されてきた (Josephs 1976; Kuno 1973; 橋本 1990; 野田 1995 ; Yamada 2018; Yamada and Kubota 2018; cf. Sode and Sugawara 2023)。

(1) 彼女が宝物を隠した {の／?\*こと} を目撃した。

一方で、ノ節同様、知覚動詞との親和性の強いトコロ節が、どのようにノ節と使い分けられているのかという点については詳細な検討がなされておらず、(2)の差異については未解明な点が多い (cf. Ikawa et al. 2022)。

(2) 彼女が宝物を隠した {の／ところ} を目撃した。

そこで、本研究では、第一に、言語テストを用いた定性的な検証から補文の位置に生起するトコロ節の意味論についての仮説を提示し、続いて、第二に、BCCWJを用いたコーパスの調査から、ト、コト、ノ、トコロがどのような動詞と結びついているのかという大局的な選択傾向を明らかにし、第三に、提示された仮説がデータと整合的であることを指摘した上で、最後に、少数の特異的なトコロ節の使用を指摘する。

なお、トコロを用いる構文には「私がいたところでどうにもならない」「ちょうど今着いたところだ」のようなものも存在するが、補文節を作らないこれらの用例については、本稿では扱わない (寺村 1978 ; 田窪・笹栗 2002 ; 田窪 2006, 2018; Takubo 2011)。





(15)a/bのうち、(15)cと意味的に交換可能なのは(15)bのノ節だけである。(15)aでは、獲物が一時的に動かなくなる一時的な状態が狙われている。例えば、獲物であるシマウマが、一時的に睡眠をとるために横になっている状況などが想定される。あくまで、一時的に動かなくなることが求められるので、その後、睡眠から覚めたシマウマが再び活動的になることがあってもかまわないという含意がある。

これに対して、(15)bでは、(15)cがそうであるように、獲物が動かなくなる状態が完了することが求められる。例えば、老いたり、傷ついたりしたシマウマが絶命するのを待っているという場面で用いられ、上記に述べた一時的に動かない状態になるというような場面では使にくい。

トコロ節で一時性が必須である点については、トコロ節は「永遠に」という副詞と共起することができないことから確認できる。

(16) a.\*ライオンは[獲物が永遠に動かなくなる場所]を狙っている。

b. ライオンは[獲物が永遠に動かなくなる の ]を狙っている。

### 3. 分析

Obviation Effect やコト節とは異なる具体性などのノ節の特徴を捉えるために、先行研究では、ノ節は命題ではなく、事象の集合を表すという分析が提案されている。例えば、Yamada (2018)の分析に従えば、(4)のノ節は(17)のように分析される（簡便性を優先し、時制についての取り扱いは無視することとする）。

(17)  $\llbracket$ 彼女が宝物を隠したの $\rrbracket = \lambda e. \lambda w. \text{hide}(e, w) \wedge AG(e, w, \text{彼女}) \wedge PAT(e, w, \text{宝物})$

このノ節の分析を下敷きに、トコロ節の意味論を考えたい。第一に、2節で論じられたトコロ節の一時性という意味が、at-issue 的な意味であるのかどうかについて議論することにしよう。そこで、トコロ節の持つ一時性という意味が、主節が否定文であっても保持されるか否かを調べるために、下記の例を見られたい。

(18) ライオンは[(\*永遠に)獲物が動かなくなる場所]を(は)狙わない。

(19) 「ライオンは獲物が動かなくなる瞬間を狙っており」、かつ、「[獲物が動かなくなる前後に獲物が動く状態が存在する]わけではない」

(20) 「[ライオンは獲物が動かなくなる瞬間を狙っている]わけではなく」、かつ、「[獲物が動かなくなる前後に獲物が動く状態が存在する]」

一時性が at-issue 的な意味であり、したがって否定オペレータと相互作用を持つのであれば、(18)は(19)という読みを持ち得るという予測になる。しかし、(19)の読みを意図して(18)を使うことはできず、(18)は(20)を意味することになる。ここから、「獲物が動かなくなっていない状態が、動かなくなっている状態の前にも後ろにも存在する」という情報は否定のスコープには入らないことが分かる。

この一時性が会話の含意によって成立しているとも考えにくい（この一時性に関する合

理的な格律を想定できない) ことも踏まえると、この(20)の下線部の意味は、前提 (Karttunen 1973) や慣習的含意 (Potts 2005, 2015) として先行研究で扱われてきた意味として扱われることが妥当であろう。ここでは、(21)に見られるように、この一時性という意味が他の前提表現と同じく Plug predicate (Karttunen 1973) によってキャンセルされる性質のものであることを根拠に、前提的意味として分析を行い、トコロ節に対して(22)に示した意味論を提案する (ただし、前提と慣習的含意の違いは研究者によって異なることから詳細については今後の研究に委ねたい)。■の後ろの意味が「 $e$  が存在量化を受けた時点で前提として生じる意味」であり、at-issue 次元とは明確に区別されている。

(21) [田中さんが[シマウマが動かなくなる場所]を見た] 山田さんは報告していたが、その獲物は一度として動かなくなることはなかった。

(22) 『彼女が宝物を隠したところ』 (Version 1 out of 3)  
 $= \lambda e. \lambda w. \text{hide}(e, w) \wedge \text{AG}(e, w, \text{彼女})$   
 $\wedge \text{PAT}(e, w, \text{宝物})$  ■ $e$ は「宝物を隠す動作が行われた瞬間」である。

第二に、より具体的に■の後ろの意味がどのように定式化できるのかを考えたい。ここでは、時間幅 (time interval) によって時間を捉える枠組み (Dowty 1979, Ogiwara 1996, 2011) に倣い、イベントが生じる瞬間というものが(23)のように捉えられるという直観を基に、(24)の分析を提案する ( $I$ は事象を取って時間幅を返す関数である)。

(23)  $e$ は「宝物を隠す動作が行われた瞬間」=  $e$ が生じる前の時間幅では宝物を隠す動作は行われておらず、 $e$ が生じた後の時間幅でも宝物を隠す動作は行われていない。 $e$ が生じている時間幅では宝隠しが実行されている。

(24) 『彼女が宝物を隠したところ』 (Version 2 out of 3)  
 $= \lambda e. \lambda w. \text{hide}(e, w) \wedge \text{AG}(e, w, \text{彼女}) \wedge \text{PAT}(e, w, \text{宝物})$   
 $\quad \blacksquare \forall e'. \forall e''. \left[ \begin{array}{c} I(e') < I(e) < I(e'') \\ \wedge \neg[\text{hide}(e', w) \wedge \text{AG}(e', w, \text{彼女}) \wedge \text{PAT}(e', w, \text{宝物})] \\ \wedge \neg[\text{hide}(e'', w) \wedge \text{AG}(e'', w, \text{彼女}) \wedge \text{PAT}(e'', w, \text{宝物})] \end{array} \right]$

しかし、この(24)の前提の記述では今回の宝隠しの事象以外、「彼女」はそれまで、そしてその後の人生一度も宝物を隠すことがないという強い意味になってしまう。そこで、コンテキストで考えられている時間幅  $\mathbb{I}$  を設定し、(24)に登場する時間幅がすべてこの  $\mathbb{I}$  の中の部分集合であるという条件を追加する。これが、(25)に示した分析である。

(25) 『彼女が宝物を隠したところ』 (Version 3 out of 3)  
 $= \lambda e. \lambda w. \text{hide}(e, w) \wedge \text{AG}(e, w, \text{彼女}) \wedge \text{PAT}(e, w, \text{宝物})$   
 $\quad \blacksquare \forall e'. \forall e''. \left[ \begin{array}{c} I(e') < I(e) < I(e'') \\ \wedge I(e') \subset \mathbb{I} \wedge I(e) \subset \mathbb{I} \wedge I(e'') \subset \mathbb{I} \\ \wedge \neg[\text{hide}(e', w) \wedge \text{AG}(e', w, \text{彼女}) \wedge \text{PAT}(e', w, \text{宝物})] \\ \wedge \neg[\text{hide}(e'', w) \wedge \text{AG}(e'', w, \text{彼女}) \wedge \text{PAT}(e'', w, \text{宝物})] \end{array} \right]$

こと の とところ 合計					こと の とところ				こと の				
思う	35	3	41,435	1	41,474	思う	0.1%	0.0%	99.9%	0.0%	思う	92.1%	7.9%
言う	789	2	16,157	4	16,952	言う	4.7%	0.0%	95.3%	0.0%	言う	99.7%	0.3%
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
聞く	139	71	923	4	1,137	聞く	12.2%	6.2%	81.2%	0.4%	聞く	66.2%	33.8%

表 1 粗頻度表

表 2 相対頻度表 I

表 3 相対頻度表 II

#### 4. コーパスによる検証

上記の分析が正しければ、トコロ節の使用に関して以下の予測が立ち上がる。第一に、タイプ A については、場所目的語を取る動詞との共起が強いということが予想される。第二に、ノ節との共通点として、タイプ B のトコロ節は、事象を補文に取る動詞との共起頻度が高くなるはずだという予測が立ち上がる。一方で、(世界の集合(命題)を表すとされる)コト節と共起する動詞とは共起をしないだろうとも予測される。第三に、ノ節との違いとして、タイプ B のトコロ節は「狙う」に代表されるような事象の一時性を強く前提とする述語とより強く共起することが予想される。そこで、これらの予測が正しいかどうかを検証するために、BCCWJ から下記のフォーマットで指定される検索式を用いて、用例を採取し、コーパスにおける頻度が 30 以上の動詞について、その分布を観察することとする。

(26)  $\left[ \begin{array}{l} \text{動詞} \\ \text{形容詞} \\ \text{助動詞} \end{array} \right] \left[ \begin{array}{l} \text{と} \\ \text{こと(を)} \\ \text{の(を)} \\ \text{ところ(を)} \end{array} \right] (\text{は}) \boxed{\text{動詞}} (\text{ている})(\text{ます}) \left[ \begin{array}{l} (\text{ん}) \\ (\text{ない}) \end{array} \right] (\text{です})(\text{た}) \text{ 補助記号}$

##### 4.1. 確率単体における分布

コーパスにおける検索の結果、私たちは表 1 に示すような粗頻度表を作成することができる。それぞれの動詞によって総頻度数が異なるため、比較可能性を高めるため、割合を計算したものが相対頻度表である。ただし、相対頻度表に生じる値は、列にどのような環境(今回のケースでは補文標識)を入れるのかによって変化する。例えば、表 2 はコト節、ノ節、ト節、トコロ節の四種類を比較して作成された相対頻度表であり、図 3 はコト節、ノ節のみに焦点を当てた時の相対頻度表である。表 2 では「思う」がコト節を取る割合は 0.1%となるが、表 3 ではト節が含まれていないため 92.1%という高い値となる。

この相対頻度をプロットすることを考える。第一に、コト節とノ節の二つしか検討しないような場合は、x 軸にコト節の割合を、y 軸にノ節の割合とし、各主節動詞の位置を丸で示すと、図 1 のような結果が得られる。ここで注目されるのは、データが、一直線すなわち一次元に分布するという点である。これはコト節の割合とノ節の割合を合計すると必ず 1(100%)になるという制約に起因する。

第二に、ト節まで検討対象に入れた場合を図示すると、図 2 のようになる。三つの節の割合をそれぞれ x 軸、y 軸、z 軸に対応させるため、3 次元空間が出現するが、実際にデータが分布するのは平面(すなわち、2 次元空間)であり、かつ、割合は 0 未満や 1 より大きくなることはないので、実際の分布は正三角形の内側に限られる。

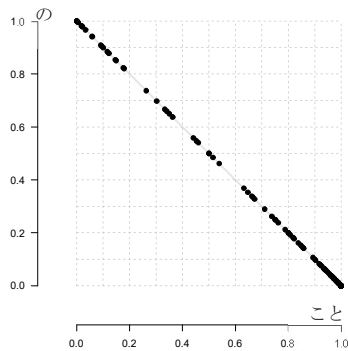


図1 二変数の確率単体

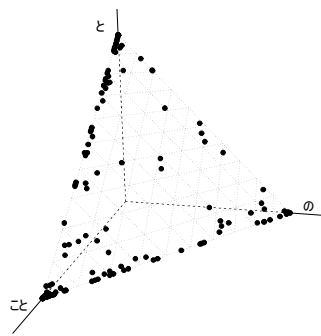


図2 三変数の確率単体

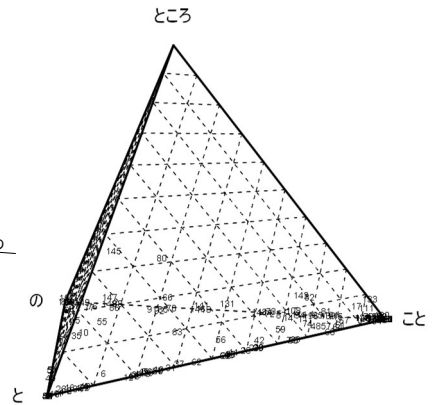


図3 四変数の確率単体

ところ

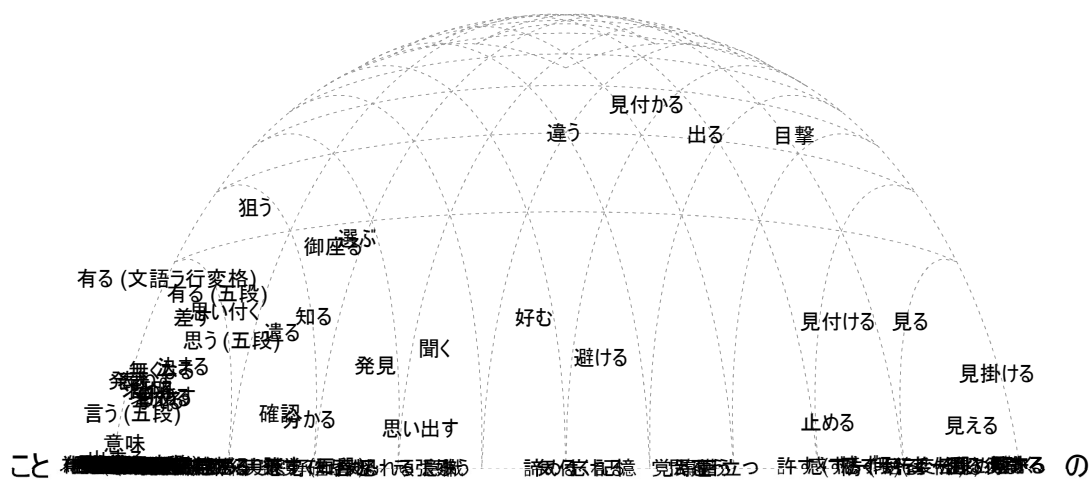


図4 コト節/ノ節/トコロ節を選択する主節動詞

上記三つの節に加え、トコロ節まで対象を広げた場合、それぞれを軸に対応させると4次元空間にデータが分布することとなる。しかし、実際には総和が1であるという上記の制約が働き、データは3次元に分布し、かつ、割合は0以上1以下という制約から、その分布は、図3に示すような正四面体の内側に限られる。一般に、 $n$ 個の表現の比較をする場合には、データは $n-1$ 次元に分布し、これを(確率)単体(simplex)と呼ぶ。

5つ以上の表現の場合、図示ができなくなるが、ここでは先行研究で対象とされてきたコト節、ノ節、そして本稿の対象であるトコロ節に限定した三変数の確率単体を考える。可読性を高めるために Hellinger 距離に即して空間を引き延ばした散布図が図4である。

## 4.2. 解釈

図4の右側に分布しているものはトコロ節を取り、かつ、ノ節の頻度が高く予測通りのふるまいを示す動詞である。一方で、図4の左に分布する動詞はトコロ節の頻度が高く、かつコト節の使用が高いので、一見すると反例に見えるが、その多くが、タイプAのトコロ節を取る動詞であることが分かる。ここから先に見た第一の仮説は実証的に支持されたと言えよう。第二の仮説についても、「目撃する」に代表されるように一時性といった意味が強く感じ

られる動詞とトコロ節の選択傾向が強くと表れていることが浮かび上がっており、提示された仮説はデータと整合的であることが示された。

#### 4.3. 今後の課題

このように大局的な傾向について本稿の分析の妥当性が示された一方で、今後より詳細な検討が求められる事例が二つ存在する。第一は、(27)に示すようなトコロ節である。この用例の「ところ」は「場所」では置き換えられない。また、「場所」は「聴（聞）け」ない。このため、タイプ A ではないと言えよう。しかし、タイプ B とも言い難い。なぜならば、(28)に示すように、このトコロ節を用いた場合、それが指す内容は「言う」事象ではなく、「言う」内容となるからである。ノ節よりもむしろコト節に近い意味が表されている。

- (27) a. [易に問いかけてその言うところ]を聴く (BCCWJ)  
 b. [ラポー・サン＝ティエンヌの語るところ]を聞こう (BCCWJ)
- (28) a. 言うのを聞く ⇒ 相手が口から音を発しているのを聞く  
 b. 言うことを聞く ⇒ 相手が話している内容を聞く  
 c. 言うところを聞く ⇒ 相手が話している内容を聞く

梶山 (1992)は、トコロには「空間的範囲」（と「時間的範囲」）だけでなく「抽象的範囲」の拡張用法があることを指摘しており、(27)に該当する例を、タイプ A である場所的範囲用法から意味拡張によって生じた抽象的範囲用法のトコロとして位置づけている。

もちろん、空間的な概念が抽象的概念にメタファー等を通じて拡張することは一般的な意味変化の方向として広く観察されるところではある。しかし、仮にそうならば、(27)の事例が古風なニュアンスを有するというジャンル性を積極的に説明することができない。なぜなら、メタファーによる拡張が、特殊な（非日常的な）ジャンルにだけ限られ、日常的なジャンルではそれが生じなかった、という非常に不自然な予測を行ってしまうためである。

むしろ、この古風なジャンルへの指向性は、この構文が漢文訓読体において発達してきたという歴史的経緯から説明されるべきであろう。漢文訓読の中でトコロ節が登場する場面には二つの類型がある。一つ目は「富与貴 是 [人之 所 欲] 也 (『論語』)」等に見る名詞化用法であり、二つ目は、受け身構文である。春秋戦国時代には様々な受動表現が存在していたことが知られているが、その中に(29)aに示すような構文が存在する (唐 1987; 椿 2004)。

- (29) a. NP<sub>1</sub> [PP 為 NP<sub>2</sub>] V 「NP<sub>1</sub>が NP<sub>2</sub>に V された」  
 (例：当知是人、[為 釈迦牟尼仏]、手摩其頭；『法華経』、椿 2004:2)
- b. NP<sub>1</sub> [PP 為 NP<sub>2</sub>] 所 V 「NP<sub>1</sub>が NP<sub>2</sub>に V された」  
 (例：方術不用、[為 人] 所 疑；『荀子』、椿 2004:3)

戦国時代以降は、受け身であることをより明示的に示すため、動詞の前に「所」を置く(29)bの構文が発達する。すなわち、日本語の-(r)are に該当する形態素が動詞の前に出現したものが「所」であると言える。重要なのは、この「所」は、受け身のマーカーであり、「場所」は一切表していないという点である。しかし、これらの文が日本語で訓ずるときには、その漢



字表記が尊重され、「NP2のVするところとなる」という読み下しが与えられ、形の上では能動文の形でありながら、受動文を表すという捻じれた用法のトコロ節が生まれることとなる。

このように、タイプCのトコロ節は、メタファーなどによる構文拡張ではなく、外国語との接触や模倣の中で登場した、Heine and Kuteva (2006)の説くところの文法複製 (Grammatical Replication) の一つの事例として理解されるべきであろう。

第二に、将来の研究で深められるべき事例として、自動詞述語と共起するトコロ節の存在がある。(30)に示されるように「見つかる」という自動詞は、本来ヲ格を取ることはできない。だが、(31)に示すようにヲ格を伴ったトコロ節とは共起することが可能であり、ノ節にはないトコロ節の独自性が指摘できる。これを、(32)のような付加詞用法のトコロ節と類似した用法だと考えたくなるかもしれないが、その場合、付加詞が動詞の選択制限とは無関係であることから、意味的な整合性さえあればこのトコロ節はどんな動詞とも生起が可能であるという予測が立つ。だが(31)と(32)の対比が示すように、トコロ節はすべての自動詞で容認されるわけではない。このような主節動詞への依存から完全な付加詞とも考え難い。

- (30) 私の足{が/\*を} 鬼に 見つかった。  
(31) 私は、[足がつった{ところ /\*の}] を (鬼に) 見つかった。  
(32) a. 私は、[角を曲がった ところで]、(鬼に) 見つかった。  
b. 私は、[角を曲がった ところで]、地面に座った。  
(33) a.\* 私は、[足がつった ところ を] 地面に座った。  
b.\* 私は、[足がつった の を] 地面に座った。

本稿の分析ではこのような特定の動詞との結びつきは予測できない。このため、これらの事例は本稿の分析への反例として認知されるべきである。ただし (31)の用法も「永遠に」といった副詞との共起が難しく「一時性」等の本稿の観察が有効な部分もある。これらの点を踏まえ、より精緻な分析が今後の研究に求められてくるであろう。

\*本研究は 2022-2027 年度基盤研究(C)「コーパス言語学と実験言語学の統合：敬語の確率的構文交替を事例に (代表:山田彬堯)」(#22K00507)、および 2021-2026 年、研究拠点形成事業(先端拠点形成型)「自然言語の構造と獲得メカニズムの理解に向けた研究拠点形成(代表:宮本陽一)」(#JPJSCCA20210001) の助成を受けた研究成果の一部である。

### 参考文献

- Farkas, Donka (1992) "On obviation," *Lexical matters*, ed. by Ivan A. Sag and Anna Szabolsci, 85-109, CSLI Publications, Stanford, CA.
- Faulkner, Tris (2022) "The two Spanish subjunctives: the required and default Subjunctives," *An International Journal of Hispanic Linguistics* 11 (1), 70-100. DOI: 10.7557/1.11.1.6334
- Giannakidou, Anastasia (2009) "On the temporal properties of mood: the subjunctive revisited," *Lingua* 119, 1883-1908.
- 橋本修 (1990)「補文標識『の』『こと』の分布に関わる意味規則」, 『国語学』163号, 112-101.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva (2006) *The changing languages of Europe*, Oxford University Press,

Oxford.

- Ikawa, Shiori, Akitaka Yamada, and Yoichi Miyamoto (2022) *Japanese Clausal Argument Ellipsis and Embedded Clause Periphery*. Presentation at Chicago Linguistic Society 58, Apr 22-24.
- Josephs, Lewis S. (1976) "Complementation," in *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative Grammar*, ed. by Masayoshi Shibatani, 307-369, Academic Press, New York.
- Karttunen, Lauri (1973) "Presuppositions of compound sentences," *Linguistic Inquiry* 4 (2), 169-193.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, Mass.
- 靱山洋介 (1992) 「多義語の分析：空間から時間へ」, カッケンブッシュ寛子・尾崎明人・鹿島央・藤原雅憲・靱山洋介 (編) 『日本語研究と日本語教育』, 185-199, 名古屋大学出版会, 名古屋.
- 野田春美 (1995) 「ノとコトー埋め込み節をつくる代表的な形式ー」, 『日本語類義表現の文法(下)』, 419-428, くろしお出版, 東京.
- Portner, Paul (2018) *Mood*, Oxford University Press, Oxford.
- Potts, Christopher (2005) *The logic of conventional implicatures*, Oxford University Press, Oxford.
- Potts, Christopher (2015) "Presupposition and implicature," *The handbook of contemporary semantic theory*, ed. by Shalom Lappin and Chris Fox, 168-202, Wiley-Blackwell, Oxford.
- Sode, Frank and Ayaka Sugawara (2023) "Nouniness, factivity and implicative readings: The case of Japanese wasureru ('forget')," Paper presented at the 30th Japanese/Korean Linguistics Conference, Simon Fraser University, Vancouver.
- 田窪行則 (2006) 『日本語条件文とモダリティ』博士論文, 京都大学.
- Takubo, Yukinori (2011). "Japanese expression of temporal identity: aspectual and counterfactual interpretation of tokoro-da." *Japanese/Korean Linguistics* 18, 392-409.
- 田窪行則 (2018) 「トコロの多義性を通じて見た言語, 認知, 論理」, 『言語研究』 154, 1-27.
- 田窪行則・笹栗淳子 (2002) 「日本語条件文と認知的マッピング」, 大堀俊夫 (編) 『シリーズ言語科学 3 認知言語学 II : カテゴリー化』, 135-162, 東京大学出版会, 東京.
- 椿正美 (2004) 「六朝訳経の受動表現」, 『身延山大学仏教学部紀要』 5, 1-7.
- 寺村秀夫 (1978) 『「トコロ」の意味と機能』, 『語文』 34 (『寺村秀夫論文集: 日本語文法編』 (1992)収録、くろしお出版) .
- 唐鉦明 (1987) 「漢魏六朝被動式略論」, 『中国語文』 第3期, 216-222.
- Villalta, Elisabeth (2000) "Spanish subjunctive clauses require ordered alternatives," *The Proceedings of SALT 10*, 239-56.
- Villalta, Elisabeth (2006) *Context dependence in the interpretation of questions and subjunctives*, PhD Dissertation, Tübingen.
- Villalta, Elisabeth (2008) "Mood and gradability: an investigation of the subjunctive mood in Spanish," *Linguistics and Philosophy* 31(4), 467-522.
- Yamada, Akitaka (2018) 「A Modal Approach to no-clauses in Japanese」, 『日本言語学会第156回大会予稿集』, 145-150.
- 山田彬堯・窪田悠介 (2018) 「ノとコト再考: 主文述語の新たな意味分類に向けて」, 『日本言語学会第157回大会予稿集』, 276-281.